2020 年 1 月 23 日

中央大学ライティング・ラボ
2019 年度後期活動報告書

抄録

2019 年度後期の実施セッション数は 564 件、昨年同時期比 3%増となり、稼働率は 68.7%（昨年同時期 66.7%）であった（Ⅰ-3）。

2019 年度後期の課題として、以下の 3 点が挙げられる。まず、高稼働率が続いた結果、学生の全需要に応えられていないことである。特に、12 月 1 月は稼働率が 80%を超え、予約が取れない状況が続き、希望者全員がセッションを受けられなかったと思われる。ラボ利用を推奨している教員と連携し、来学期以降は、比較的空いている時期でのラボ利用を推奨していきたい。なお、全需要に応えるためには繁忙期のみセッション設置数増加を検討することもできるが、チューター人員不足から繁忙期のセッション設置数増加は不可能である。次に、高稼働率により、スーパーバイザー、アソシエイト・スーパーバイザーもセッションに入るという状況が継続し、ラボ運営に費やす時間が著しく減少したことである。チューター研修の実施、ラボの宣伝、環境整備はセッションの質の維持に関わる業務であるため、来学期以降はラボ運営業務に関わる時間を充分に確保していきたい。最後に、卒論・修論締め切り直前の駆け込み需要の多さである。締め切り直前に大量の文章を持って来室し、チューターによる一方的な添削を求める学生もいた。そのため、学生の思ったようにセッションが進まず学生の満足度が下がる、チューターが学生の要望に対処できず困惑するというような状況が見受けられた。ラボの理念に則ったセッションを実施し、セッション効果を高めることで学生の満足度も上げるために、早い時期からの来室を教員やポスターを通じて、推奨していきたい。

ラボの円滑な運営に向けて、チューターの人員体制を整え、スーパーバイザー、アソシエイト・スーパーバイザーがラボ運営業務に携わる時間を確保していくのが来学期の課題である。

以　　上

はじめに

2019 年度後期におけるライティング・ラボの活動状況について、以下の通り報告する。Ⅰでは開室状況と利用実績、Ⅱではセッション以外の活動、Ⅲでは来期にむけて特筆すべき所見を述べる。

Ⅰ　開室状況と利用実績

Ⅰ-1　開室期間と日数、チューター配置数

開室期間：2019 年 9 月 23 日から 2020 年 1 月 16 日までの月曜・火曜・水曜・木曜
開室日数：　56 日
設置セッション数：821 コマ[1]

スーパーバイザー（SV）：中野玲子
アソシエイト・スーパーバイザー（ASV）：峰尾菜生子
チューター15 名（一人当たり 4～8 コマ担当）

Ⅰ-2　受付方針　（2019 年度後期）

受付優先順位および予約の可否は、文章の種類（対象文章かそれ以外か）に基づく。

1. 対象文章
   授業で課題となったレポート及び発表レジュメ、卒業論文、修士論文、博士論文、投稿論文、プレゼンテーション原稿（スライド用・口頭用）、研究計画書、ボランティアセンター報告書、総合政策部プロジェクト活動報告書

2. 空きがある場合につき、受け付ける文章　（予約不可）
   奨学金応募書類に含まれる志望動機書
   留学志望書
   公務員試験練習課題
   そのほか、アカデミック・ライティングの観点でコメントできそうな文章
   外国語／日本語翻訳（授業の課題のみ）

3. 受付不可とする文章
   就職活動関係の文章（キャリアセンターへ案内）
   メールや手紙の文章
   公務員試験以外の筆記試験対策のための相談

[1] 稼働可能なブース数すなわちチューターの配置数をコマとしてカウントした。

Ⅰ-3　実施セッション数と稼働率

実施セッション数（延長を含む）：564 コマ（前年比 103.1%）

セッション稼働率：68.7%（前年度稼働率 66.7%）

表 I-3-1　月別セッション数と稼動数・稼働率

	設置数	稼動数	稼働率
9月	58	29	50.0%
10月	234	125	53.4%
11月	226	163	72.1%
12月	220	177	80.5%
1月	83	70	84.3%
後期全体	821	564	68.7%

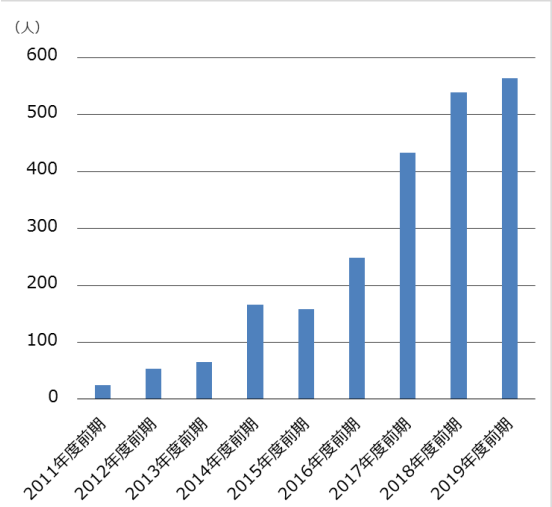

図 I-3-1　利用学生数の推移（前期・延べ）

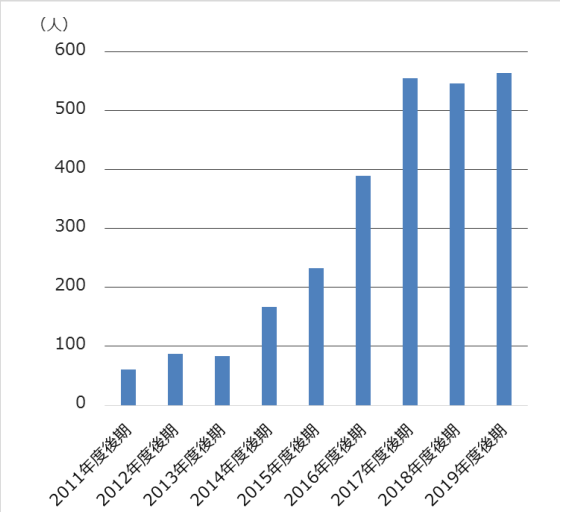

図 I-3-2　利用学生数の推移（後期・延べ）

注 1）2013 年度より日本人学部生の利用が開始された。

注 2）2016 年度までは連続セッションは 1、同一学生が同日別のセッションで再利用した場合は 2 とカウント。2017 年度以降は実施セッション数に基づくため、同一学生の同日利用および連続セッションを含む。

【所見】

前年同レベルの高稼働率を維持した。セッションを希望する全学生の需要に応えるためには、来年度以降のセッション設置数増加を検討しなければならないものの、**現在のチューター人員規模ではこれ以上のセッション設置数増加は不可能**である。

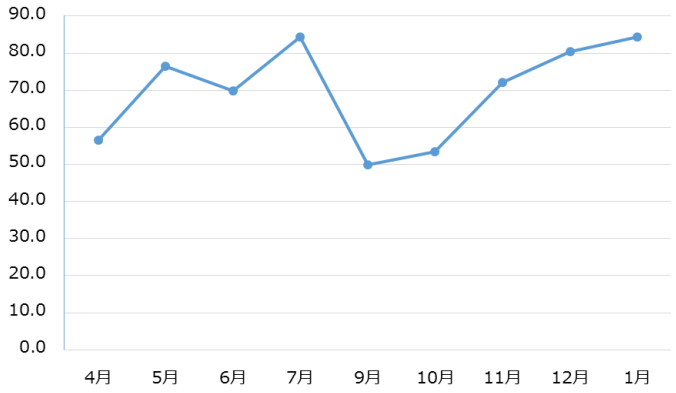

図 I-3-3　月毎セッション稼働率の推移（2019年度）

【所見】

12 月 1 月の 80%以上の稼働率は、実質的にはこの期間はほぼ 100%に近い稼働率であるといえよう。高稼働率の結果、予約が取りづらくなり学生の全需要に応えられない、セッションが延長不可能のため学生の満足度が下がるという影響が考えられる。特に、卒論修論の駆け込み需要時期には高稼働率となったため、来学期以降は**早めの来室の呼びかけを教員を通して推奨するなどの対策を検討**したい。

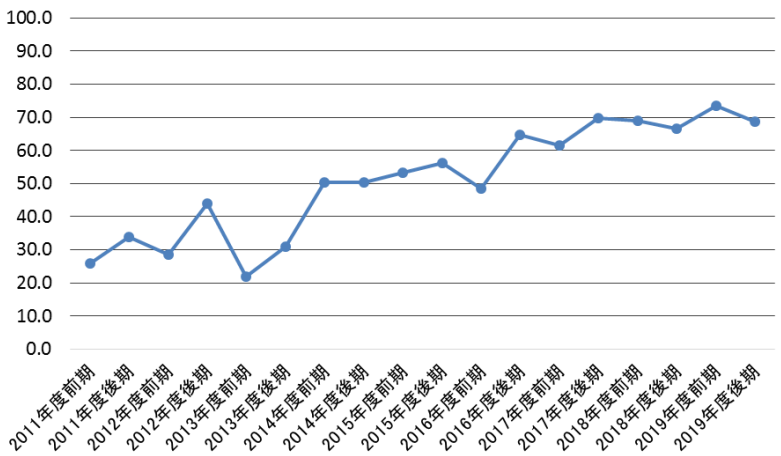

図 I-3-4稼働率の推移（2011-2019年度）

【所見】

今学期の平均稼動率は 60%台後半となり、高稼働率を維持した。この結果、スーパーバイザー、アソシエイト・スーパーバイザー共に常時セッション対応するという状況が生じ、ラボ運営に関わる時間が著しく減少した。ラボの広報、環境整備などのラボ運営業務はセッションの質の維持にとっても重要な課題である。来学期以降は、**ラボ運営業務に費やす時間を確保**していきたい。

Ⅰ-4 利用学生の内訳

＊利用学生数（延べ）[2]

2019年度後期合計	564名	（前年比 103.1%）[3]
大学院日本人学生	0名	（前年度 22名）
大学院留学生	153名	（前年度 216名）
学部日本人学生	364名	（前年度 258名）
学部留学生	47名	（前年度 51名）

【所見】

昨年度に引き続き、学部日本人学生の利用増加が顕著であった。特定の教員によるラボ利用の推奨が要因であろう。一方、留学生の利用は減少した。高稼働率により、連続セッションが予約できないことが要因であろう。また、大学院日本人学生の利用がゼロとなった。3月実施予定の学振道場において、広い範囲の読み手が初見でも理解できる文章表現の必要性を訴え、ラボの利用に繋げていきたい。

＊利用学生の所属

法学研究科	27名
経済学研究科	4名
商学研究科	26名
文学研究科	47名
総合政策研究科	49名
法学部	94名
経済学部	90名
商学部	55名
文学部	150名
総合政策学部	19名
通信・その他	3名

＊利用学生の学年

学部1年	116名
学部2年	21名
学部3年	75名
学部4年	169名
学部5年以上	28名
博士課程前期／修士1年	12名

[2] 延べ利用数。実施セッション数に基づくため、同一学生の同一日利用および連続セッションを含む。
[3] 教授会での教員への広報、および「出張宣伝」による学生への広報活動の成果と思われる。

博士課程前期／修士２年	103 名
博士課程前期／修士３年以上	17 名
博士課程後期３年	17 名
博士課程後期４年以上	2 名
研究生	2 名
その他	3 名

＊利用学生の母語

日本語	373 名
中国語	154 名
タイ語	28 名
韓国語	10 名

Ⅰ-5　相談文章の種類

卒業論文	164 件
修士論文	91 件
博士論文	3 件
授業のレポート	179 件
投稿論文	18 件
研究計画書	6 件
授業の発表資料	6 件
学会で発表予定の発表資料	1 件
その他	51 件

※その他の内訳　　奨学金応募書類、学内ゼミ応募書類、大学院入試小論文など

Ⅰ-6　ネット予約状況

前期を通じてネット予約が取りづらい状況が続いた結果、後期は早めにネット予約をする学生が増加した。その結果、課題文執筆が思うように進まなかったり、別の予定が入ったりするなどで、予約の当日キャンセル数も増加した。

ネット予約月別数

9 月	15 件
10 月	68 件
11 月	103 件
12 月	75 件
1 月	35 件
合計	296 件

Ⅰ-7 利用学生からの評価――アンケート調査より

各セッション終了後、利用学生に任意でアンケート記入をしてもらった。アンケート回収数は 469 通。各質問項目と結果は以下の通りである。

1. セッションは有益だったか[4]

有益ではなかった	6 件[5]
あまり有益ではなかった	5 件
有益だった	98 件
とても有益だった	357 件
無回答	3 件

2. セッションで有益だったのは何か[6]

日本人学生

○一緒に検討する過程でのやりとり
○構成、構成要素に関する気づき
○文や語句に関する気づ
○内容や思考の整理に関する気づき
○作業手順に関する気づき

留学生

○一緒に検討する過程でのやりとり
○構成、構成要素に関する気づき
○内容や思考の整理に関する気づき
○日本語文法に関するコメント

【所見】

(1) 学部 1 年生 2 年生は「レポート作成」のプロセスがわからず、来室しているケースが多いことがわかる。レポートの基本的な書き方の支援に加え、レポート作成のプロセスを指導する必要があるといえる。

(2) チューターと一緒に検討したことが有益だったというコメントが見られることからも、ラボの理念に沿ったチューターのセッション技術の向上がわかる。

3. セッションまたはラボに対する要望など 【日本人学生・留学生あわせて】

○セッション増希望　　計 17 件

---

4 「有益ではなかった」「あまり有益ではなかった」「有益だった」「とても有益だった」の 4 段階評価。
5 「1. 有益ではなかった」の 6 件中 3 件は、コメント欄に有益だったと分類できる記載があるため、「4. とても有益だった」の記入ミスと考えられる。
6 自由記述方式。コメント（原文ママ）を任意に抽出した。

・金曜日開室希望　　4件
・コマ数増加　　2件
・時間延長　　9件
・開室期間延長　　2件

【所見】

特に 12 月 1 月の修論シーズンは、予約が取りづらいこと、留学生の延長希望などが多く、セッション増の希望が多かったと考えられる。

○チューターの専攻別・担任性希望　7件

【所見】

今後もラボの理念に則り、専門領域横断での支援を続ける。

○予約方法の改善　5件

【所見】

木曜夕方以降と金曜は学生のネット予約から予約確定連絡まで日数がかかるため、予定が変わりキャンセルになる確率が多かった。来学期は閉室日に来るネット予約への対応について、検討したい。

また、現状では、キャンセルや変更に関してはラボに直接電話させているが、チューターがセッション中に電話の対応もしなければならず、セッション中の学生を待たせることがあった。セッションに入っているチューターが集中できる環境を作るためにも、ネットからのキャンセルを検討したい。

○広報の改善　2件

【所見】

来室のきっかけは「教員の勧め」が多いので、教員を通してラボの宣伝を実施していきたい。

○その他　3件

・事前添削を希望（同内容２件）
・遠隔セッション希望１件

【所見】

ラボの人員や設備等が整備できた後、将来的な課題としてラボでのセッションに加え、ネット上でのセッションも検討していくことは可能である。

Ⅱ　セッション以外の活動

Ⅱ-1　広報活動

Ⅱ-1-1　授業への出張ガイダンス

前期同様、全教員へ向け、チラシとメールで出張宣伝の実施を告知。宣伝はチューターが担当した。ガイダンスの依頼数は少なく、特定の教員からのみの依頼であった。

＊出張ガイダンス　　計 4 件

【所見】

出張ガイダンス時はセッション設置数を減らして対応しているが、チューター人員不足のため出張ガイダンス時に閉室とせざるをえない状況も出てくると思われる。教員を通した広報は効果が高いため、出張宣伝に変わり、ラボ紹介ビデオの配信について来学期は検討したい。

Ⅱ-1-2　ポスター掲示

卒論・修論の利用が増加する白門祭後にポスターを掲示して、早めの来室を呼びかけた。しかしながら、今学期も卒論・修論提出間際になってのラボ利用が多かった。来年度は留学生の修士論文執筆者には、教員を通して早い段階からのラボ利用の推奨を広報していきたい。また、ポスターの文言に早めの来室を強く推奨できるよう工夫していく。

Ⅱ-2　チューター研修

今学期は、勤務時間内研修と集合研修の２種類を実施した。勤務時間内研修では、自分の担当セッション振返り、及び文章診断用課題文の選考を実施した。集合研修では、文章診断、模擬セッション、新人チューターセッションの振り返りを実施した。

【勤務時間内研修】

＊担当セッション振返り

＊文章診断用課題文選考

【集合研修】

＊文章診断練習

＊模擬セッション

＊新人チューター担当のセッション振返り

【所見】

全学期を通して、高稼働率を維持したため、チューター研修時間の確保が問題となっている。勤務時間内研修と集合研修を効率よく組み合わせた研修プログラムが必要である。今期実施した、新人チューター

の振返りでは、自身による振返りと他者も交えた振返りの２通りを実施することができ、セッション技術の向上と伝承という点で有効であることがわかった。

Ⅱ-3　中央大学杉並高等学校へのチューター派遣

今学期はチューター不足のため、週 1 日のみの派遣となった（昨年度は週 3 日）。来学期もチューター不足のため、週 1 日のみの開室となる見込みである。

なお、院生のキャリア形成支援の一環として、2018 年後期までラボに勤務していた元チューターを推薦し、チューターとして高校と直接契約してもらった。

＊開室期間とチューター数

開室期間　　2019 年 10 月 3 日から 11 月 7 日までの木曜
開室日数　　4 日
チューター数　3 名

＊利用実績

設置セッション数　　41 セッション（前年度同時期 50 セッション）
セッション実施数　　33 セッション（前年度同時期 47 セッション）
セッション稼動率　　80.5%（前年度同時期 94.0%）

【所見】

（1）前年同時期は 94.0%であった稼働率が、今学期は 10 ポイント以上減少し、80.5%となった。稼働率が減少した要因として、前期中に、大学からのチューター派遣やワークショップを行うことができなかったため、認知度や利用希望の程度が下がっていると推測される。

（2）大学のラボの人員規模・人員配置の問題があり、来学期も大学から派遣可能なチューターが 1 名程度になると予想される。修士修了チューターのキャリア形成の場になることから、大学からの派遣の代わりに、修士修了のチューターを雇用できないか高校側に検討していただく。

Ⅱ-4　学振道場開催

大学院生対象にアカデミック・ライティング及びラボの周知、また新人チューター対象に博論や投稿論文など難易度が高い文章を検討するセッションのためのスキルアップを目的としたワークショップを実施（3 月 26 日実施予定）。準備段階から参加したチューターは、アカデミック・ライティングの観点、難易度の高い文章を検討するポイントなどについて学んだ。

【所見】中大大学院生のアカデミック・ライティングスキルの向上、またチューターのセッションスキル向上という目的をあわせ持つ。外部の競争的資金獲得およびセッションの質向上に向け、可能な支援を実施していきたい。

Ⅲ　来期に向けた所見

Ⅲ-1　チューター公募について

今期 3 名のチューターが離任し、来期もチューター不足が見込まれるため、今学期も公募を実施した。

Ⅲ-2　チューター体制について

チューター不足により、スーパーバイザーとアソシエイト・スーパーバイザーも常時セッションに入るという状況が学期中継続したため、ラボ運営業務に関わる時間が不足し、その結果チューターがよりよいセッションを実施する環境整備に手が回らなかった。可能な範囲でチューター体制を整え、ラボ運営に関わる業務時間を確保していきたい。

Ⅲ-3　来学期の運営について

来学期は、スーパーバイザー1名、アソシエイト・スーパーバイザー１名に加え、シニアチューター2名の体制でラボを運営する。チューター不足の状況は継続するが、セッション環境を整え、ラボを周知する活動もこの４名を中心に行っていきたい。

以上

2020 年 1 月 23 日
スーパーバイザー　中野玲子
アソシエイト・スーパーバイザー　峰尾菜生子